

第2章 古川市直営期の活動と運営（1995～2001）

はじめに——古川市直営の6年

1995（平成7）年1月29日、吉野作造記念館は開館の日を迎えた。この後2002（平成14）年3月までは、古川市直営の施設として運営されることになる。

開館記念式典には195名の招待客が出席した。吉野作造の親族からは作造長男の吉野俊造氏夫妻と俊造氏長女で作造の孫にあたる雪子氏、同じく作造の孫にあたる平澤篤子氏（作造五女・三島敬氏の長女）、作造の兄弟の親族から吉野孝雄氏（作造弟・吉野信次氏の長男）、戸石八千代氏（作造甥・戸石泰一氏夫人）、吉野敏郎氏（作造甥・吉野達三氏の長男）など、その他吉野の関係者の親族、吉野研究者などが多数出席した。古川市からも市議会議員、名誉市民などが出席した⁽¹⁾。また、出席者には吉野作造書の色紙「路行かざれば到らず 事為さざれば成らず」（1932年、吉野家蔵）のレプリカが配布された。

式典で中川俊一古川市長は「吉野博士が提唱した民本主義は、戦後の民主主義へと継承され、私たちの生活にしっかりと根づいています。記念館を21世紀に向けたまちづくりの顔として、またデモクラシーをテーマにした文化の創造施設として、親しまれる施設にしたい」（『大崎タイムス』1995年1月31日）と挨拶した。また東京大

学法学部長で建設委員会の学術顧問も務めた三谷太一郎氏による開館記念講演「吉野作造と現代」が行われた。

開館時の記念館職員は下の通り（括弧内は前職）である。

- ・館長 落合利恵子（元小学校長、古川市社会教育委員）
- ・記念館管理課長 岡野豊彦（建設準備室長）
- ・同管理課管理係長兼学芸係長 早坂敏明（建設準備室総務企画係長）
- ・同管理課主査 日下義勝（建設準備室主査）
- ・同研究員：田澤晴子（研究員）
- ・同学芸員：青木真由美（学芸員）

市の直営時代は企画展のほか、吉野作造講座、ゴールデンウィーク（GW）や夏休みの家族向けイベントなど、その後も記念館の軸となる事業の大枠ができあがった。作家井上ひさし氏の名誉館長就任や、吉野作造賞受賞者を招いての講演会など、後に開始される事業の元となる人的なつながりが形成されたことも重要だといえるだろう。

記念館外での注目すべき動きとしては、1999（平成11）年、郵政省発行の「20世紀デザイン切手」第3集のデザインの1つとして吉野作造の肖像が採用されたことが挙

げられる。吉野の顕彰事業として切手を発行するという案は、1950（昭和 25）年に東京で発足した吉野の顕彰団体である吉野博士記念会でも発案されており(2)、約 50 年越しでの実現となった。

運営審議会 直営時代には吉野作造記念館運営審議会（以下「運営審議会」）が置かれていた。運営審議会は吉野作造記念館設置条例（1995〈平成 7〉年 1 月 29 日）第 12 条により設置されたもので、理解度や年齢に応じた企画展・講演会、漫画・アニメ伝記制作といったソフト事業を展開するため、教育・文化関係の市民 10 人で組織された。『吉野作造記念館館報』（1999〈平成 11〉年 3 月）には運営審議会の開催記録が収録されており、それによれば開館直前の 1994（平成 6）年 12 月 27 日に第 1 回、開館後の翌 1995（平成 7）年 6 月 9 日に第 2 回が開催され、1996（平成 8）年 6 月 7 日の第 3 回以降は概ね年 2 回の開催で、記念館事業報告および事業計画、入館状況について審議された。1999（平成 11）年度以降の開催状況は不明である。なお、現行の吉野作造記念館条例（2006〈平成 18〉年 3 月 31 日）には運営審議会に関する条項はない。

開館直前の新聞記事によると、審議会第 1 回会合時には開館時間の長さ（9 ～ 16 時）への疑問が出された。「自主事業を中心に、吉野に関する情報を専門的に扱う施設として運営していこうとする市と、施設開放を望む市民代表との考え方の違いが表面化」していたという（『河北新報』1995 年 1 月 16 日）。

第 1 節 開館直後の盛況

開館初年度である 1994（平成 6）年度は実質 2 か月ほどであったが、この間の入館者数だけでも 4,536 名を記録している。そのうち約 2,500 名は、1 月 31 日～2 月 5 日の開館記念無料公開期間の来館者である。

続く 1995（平成 7）年度は、計 8 回の企画展・特別展など展示活動を中心に力が注がれ、2024（令和 6）年現在まで最多の入館者数である 12,062 名を記録している。1997（平成 9）年度までが企画展・特別展を軸とした運営のピークといえる。展示だけでも多くの来館者があつた。政治学者の記念館という珍しいテーマもあつて、当初はメディアの注目も大きかったといえよう。市民有志により案内板やモニュメントなどの寄贈が相次いだのもこの時期である。

1997（平成 9）年 5 月 19 日には、天皇皇后両陛下がご来館した。第 48 回全国植樹祭に伴う宮城県行幸（5 月 17 ～ 19 日）の一環で、当時の浅野史郎宮城県知事、伊藤宗一郎衆議院議長らも来館した。

常設展示室 開館当時の資料は、常設展示室が書籍・雑誌 39 点、書簡・原稿 16 点、遺品など 13 点に、パネル 36 点を加えて合計 104 点であった。

乃村工藝社の制作による常設展示室映像「われらが同時代人吉野作造」は、吉野と現代の少年との対話のような形式で吉野の生涯とその思想および時代背景をたどる内容である。展示室中央に設置された、書籍を模した可動式大型スクリーンにメイン映像、その上部の 3 面マルチスライドには字幕や

補足資料が映し出されるという、大掛かりなものであった。上映時間は約 20 分で、1 時間おきに展示室を暗転させ自動上映された。設計段階から文字通り常設展示室の中心的ディスプレイと位置付けられていたと考えられる。映像制作にあたっては橋平酒造店（現：醸室）周辺など古川市内各所でロケが行われ、市民もエキストラとして出演した。撮影に協力した人々は開館記念式典にも招待されている。

バーチャル・デモクシー・ディスプレイ 「見るだけではなく、市民参加型の記念館を」という理念のもと、乃村工藝社が制作し、記念館企画展示室入口前に設置されていた装置。来館者がコンピュータと「学校週 5 日制」「米輸入自由化」「夫婦別姓」といった時事問題をテーマに、イエス・ノー形式で意見発表を行う。発表の内容は録画され、別モニターで観ることができた。当時最新のデジタル・メディア技術を利用した「仮想的討論システム」を謳うもので、開館当時は常設展示室の映像と並ぶ中心的コンテンツと位置づけられていたようである。

2024（令和 6）年現在は撤去され使用できない。使用されなくなった理由は機器の故障かシステムの陳腐化によるものか詳細は不明だが、2002（平成 14）年 4 月 2 日『河北新報』には記念館の「目玉装置」として紹介されており、少なくとも民間委託期までは稼働していたと思われる。

企画展・特別展 特別展・企画展に関して、初期においては吉野作造に関する調査研究成果発表を「企画展」、吉野に直接関連しない展示を「特別展」と区分し、実施してい

た。ただしこの区分は『吉野作造記念館館報』（1999（平成 11）年）によるもので、1999 年度以降は公式での区別はみられない。

開館当初は常設展示室および特別展「吉野作造をめぐる人々」（1995（平成 7）年 1 月 29 日～3 月 30 日）を開催。吉野が知人と交わした書簡や交流のあった人々の写真、吉野の羽織や袴など、54 点を展示した。借用資料として渋谷家蔵の書簡類や、仙台第一高等学校所蔵の大槻文彦胸像・木箱なども展示した。なお本展示は、開館記念式典を研修室・企画展示室で行う関係から、講座室での開催となった。

事実上の初年度である 1995（平成 7）年度は、小規模、短期間の展示を含めれば企画展・特別展が計 8 回開催された。企画展「明治のなかのヨーロッパ—吉野作造と明治文化研究会」（8 月 1 日～9 月 30 日）、「魂の共感—吉野作造と芝居」（2 月 6 日～3 月 31 日）では、それぞれ東京大学明治新聞雑誌文庫、台東区立下町風俗資料館などから資料を借用している。

特別展「赤い鉄道馬車—ふるかわの明治・大正」（5 月 3 日～6 月 30 日）は、古川市在住の紺野敏雄氏が自費出版した同名絵本の原画展で、「地域の文化振興のための記念館として、市民が身近に感じる題材を企画し古川の近代をわかりやすく伝えるため」に企画された。同じく特別展「異郷浪漫の風景—米城善右衛門写真展」（11 月 1 日～12 月 26 日）は、古川出身の米城善右衛門が、1930 年代に満洲の製薬会社に勤務していた時代に撮影した同地の風景の写真展である。米城の写真を多数所蔵している名

古屋市美術館の協力を得て開催された。

他団体との共催も多く、『大崎タイムス』の連載との連動企画「あれから半世紀 私
の戦争体験」(8月)、古川市台東区姉妹都市
交流事業「〈特別展〉江戸から東京へー下町
のくらし」(12月8日～1月28日)などが
行われた。NHK仙台共催による特別展
「赤い鉄道馬車ーふるかわの明治大正」(9月
20～24日)は、2024年現在まで当館唯一
の放送局との共催による企画展・特別展と
なっている。

1996(平成8)年度は企画展2回に特別展
2回が開催された。企画展『民本主義』の
80年(12月10日～3月9日)は、大宮市
漫画会館、日本漫画資料館、仙台市博物館、
原敬記念館、盛岡市先人記念館、石巻文化
センターなど、県内外の多くの施設の協力
を得た。

1997(平成9)年度は企画展3回に特別展
1回が開催された。企画展「吉野作造と古川
ー青春の明治時代」(4月22日～6月29
日)では、吉野ゆかりの人物の子孫への聞
き取り及び資料調査、「渋谷栄太郎と大正デ
モクラシー」(12月9日～2月28日)では、
市民ギャラリー緒絶の館と共催で、両館を
会場に歴史資料の展示と絵画展示を並行し
て行うなどの試みが行われた。

1998(平成10)年以降は企画展・特別展
は年間2～3回程度となり、「企画展」に相
当する展示を年1回、その他は写真展や新
収蔵資料展といった、比較的テーマ性の薄
い展示が行われるようになる。

市民の支援 開館と合わせ、古川東ロータ
リークラブが同クラブ創立15周年記念事業

として、記念館敷地にモニュメント「民本
の鐘」を寄贈した。同様に古城ライオンズ
クラブからは「館名碑」が寄贈、建立され
た。また佐藤利市氏から環境美化のサクラ
植樹に30万円、吉野敏郎氏から関係図書購
入費として100万円の寄附があった。

1995(平成7)年6月、市内の阿部徳夫氏
により、福沼地区に記念館の案内板が設置
される。記念館への案内標識・看板の少な
さは開館当初より指摘されており、それを
聞いた阿部氏が善意から市に申し出て取り
付けたという(『大崎タイムス』1995年6月
28日)。

1997(平成9)年8月15日には映画「G
AMA一月桃の花」上映を成功させる古川
の会より古川市への寄贈として記念館前広
場に「平和の碑」(三本木町・小関俊夫氏
作)が設置された。また翌1998(平成10)
年5月3日には吉野作造生家跡にモニュメ
ントが建立された。古川ロータリークラブ
創立40周年記念事業によるもので、本と書
見台を模したものである。吉野が教え子に
送ったとされる言葉「人生に逆境はないど
んな場合にでも人と世の為に尽しうべき機
会が潤沢に恵まれている」が刻まれている。

1999(平成11)年11月14日には、古川
東ロータリークラブ創立20周年記念式典で、
同クラブから古川市に、記念館の案内標識
塔「学人の塔」が寄贈された。

刊行物 1995(平成7)年1月29日、古川
ロータリークラブが製作費154万円を寄附
する形で『古川余影』(1933年)の復刻を行
った(1,500部)。さらに11月20日、同会
により復刻版『故吉野博士を語る』が刊行

される。中央公論社が協力し同社で復刻。1,500部印刷され、1,000部は古川市に寄贈、500部は吉野先生を記念する会会員に配布された。いずれもその後、記念館内にて販売を続けている。

1995（平成7）年6月、手に取りやすい吉野作造の伝記としてブックレット『大正デモクラシーの旗手吉野作造』を刊行した。同年7月25日に1万人目の来館者を迎えた際には、テレホンカードや色紙レプリカなどのグッズと共に贈られた。2016（平成28）年の改訂を経て、吉野作造に関する入門書として現在まで販売を続けている。

1998（平成10）年3月31日には、吉野作造生誕120年記念事業として、仙台市在住の漫画家千葉真弓氏による吉野作造の伝記漫画『蒼穹色のまなざし』を刊行した。執筆にあたって千葉氏は吉野作造長男の俊造氏の元に通って取材を重ねたという。

また、記念館の刊行物ではないが、1995～1997（平成7～9）年に配本された岩波書店による『吉野作造選集』（全15巻および別巻）には、第12巻（随筆）に収録された「〔吉野先生のために妄をひらく〕」や別巻収録の書簡など、吉野作造記念館の所蔵資料が多数収録されている。

吉野先生を記念する会主催講演会 吉野先生を記念する会主催による行事は、記念館開館前から古川市内の各会場にて行われていた。開館後は記念館を会場に、記念館事業と並行する形でたびたび開催されている。特に1992（平成4）年度から1996（平成8）年度までは、吉野作造命日である3月18日またはその前後に「作造忌」と題した講

演会を開催していた。

1993（平成5）年3月18日、武田清子氏（国際基督教大学名誉教授）による「吉野作造の民本主義—戦後デモクラシーの根をさぐる」、1994（平成6）年3月18日、井出武三郎氏（埼玉純真女子短期大学教授）による「日本の民主主義の三つの青春期—吉野作造とその時代」、1995（平成7）年3月31日、松尾尊兌氏（京都大学名誉教授）による「吉野作造と東アジア」、1996（平成8）年3月18日は、『中央公論』元編集長の粕谷一希氏による「編集者の見た吉野作造」（会場：グランド平成）、1997（平成9）年3月16日は、文化人類学者の山口昌男氏による「吉野作造と街かどアカデミー」が開催されている。

第2節 利用者層拡大の取り組み

開館後間もなくの新聞記事をみると、記念館の利用者層に関して以下のような記述がある。なお、カギ括弧内は落合利恵子館長のコメントである。

これまで五千人を超える入館があった。市内や近隣の町村からの入館者が多いが、首都圏や関西方面からの来館もあるという。しかし、一番来てほしい年齢層にはやや敬遠されている。「高校生に来てほしいですね。政治や思想について考え始めるころですから。ここで大いに刺激されてもらえたらと思います」。若者に人気のある記念館にするのが、これからの課題だ。（『河北新報』1995年5月17日）

1994（平成 6）年度から 1995（平成 7）年度にかけて、館外での講演活動等は 11 件で、依頼を受けての対外活動は初年度より盛んに行われていたが、展示活動を除いて記念館側からの積極的な取り組み、特に小・中・高校生を意識したような事業はみられなかった。一方で館外では、記念館開館による触発を受け学校教育において吉野作造を題材とした意欲的な授業が行われるようになっていく。

1996（平成 8）年度以降入館者数は漸減を始め、市民講座、出張講話などの活動が積極的に行われるようになる。この年から市民講座「吉野作造講座」が始まった。翌 1997（平成 9）年度からは小・中学生、高校生向けの事業が本格的に展開されるようになる。また、小・中学校移動企画展として、写真パネル展「吉野作造の生涯」が開催された。

家族連れを意識した取り組みも始まる。

1996（平成 8）年 5 月 5 日、こどもの日映画会を開催。以後毎年 5 月 5 日こどもの日を中心とする期間に、小学生児童や親子を対象とした事業を開催したほか、5 月 5 日は小・中学生の入館料を免除し、来館者の拡大に努めた。

1998（平成 10）年には、作家の井上ひさし氏が記念館名誉館長に就任し、「井上ひさしの吉野講座」が恒例行事となる。

小・中学生、高校生向けの取り組み 1996（平成 8）年度、吉野の少年時代を写真で分かりやすく解説する「〈特別展〉吉野作造を知ろう」（4 月 27 日～3 月 31 日）が開催された。

1997（平成 9）年度からは、小・中学校移動企画展「吉野作造の生涯」が開催される。写真パネルと親しみやすい文章を用いた展示で、吉野作造の母校古川第一小学校（12 月 1 日～）を皮切りに市内 5 校を巡回、5～10 日間程度の日程で行われた。

校外学習での利用も活発化する。1996（平成 8）年 12 月に古川高等学校 1 年生 8 クラスによる「倫理」「政治・経済」の移動教室が行われた。担当教諭が 1 クラス毎に引率、吉野作造の生涯や企画展の説明を聞き、レポートを作成するという内容で、以後、同様の内容で毎年行われるようになる。1998（平成 10）年度以降は小学校の見学も行われるようになる。この年 11 月下旬～12 月上旬には古川第二小学校 6 年生で吉野作造を取り上げた授業が行われ、事前学習、出前授業、記念館の見学、発表が行われた。以下に、生徒たちの感想を抜粋して紹介する。

授業で学ぶ「民主主義」や「社会主義」という言葉は正直いって“さっぱり”理解できませんでした。記念館見学で理解の道が開かれた気がします。吉野の生涯を通して行った活動、これが人間の最善の姿なのではないかと思います。日本国民だけではなく全世界の人達の幸福を考えていくことが政治であり、彼自身が人々の心や想いを一番感じた人なのかも知れません。今日の政治で足りないことは、この国民全体の幸福を中心にとすることだと気づかされた思いです。（古川高等学校 1 年 相沢友博さん、1998 年）(3)

吉野作造さん、私達六年生は今、社会の勉強で、あなたのことを調べています。今までは、「古川出身の有名人」ぐらいにしか吉野さんのことを知りませんでした。ごめんなさい。だけど、この間、吉野作造記念館に見学に行ったりして、吉野さんがどんなことをした人なのか知ることができました。

吉野さんは、誰でも差別のない、みんなが楽しく暮らせるような日本をつくりたかったんですね。今、日本は吉野さんの望んだように、民主主義の政治が行われていますよ。今の日本があるのは、吉野さんのおかげなんだ、ということを知ることができました。

吉野さんは、どんなことがあってもみんなのことを考える人だったそうですね。吉野さんのことを、もっともっとたくさんの人に知ってもらえたらいいと思います。(古川第二小学校 6 年 佃結希さん、1998 年) (4)

1999 (平成 11) 年 8 月 21 日には、なつやすみ親子教室「吉野作造の歩いた場所をたどってみよう」というイベントが行われた。これは古川市内にある吉野作造ゆかりの場所を徒歩でめぐるとい企画で、古川市役所 (旧志田郡役所跡)、古川第一小学校、古川座跡、吉野生家跡などを見学した。またこの年は夏休み宿題相談コーナーなど、吉野に関すること以外の学習支援事業も行っている。

2001 (平成 12) 年 7 月 25 ～ 27 日、「中高生のための吉野作造講座」と題した 3 日間

の連続講座が行われた。解説・講師は高橋よし子氏 (元古川女子高等学校教諭)、田澤晴子主任研究員。小学生向けには、クイズに答えて景品をもらうという企画「館内探検! 吉野作造を探してみよう」(7 月 21 日～8 月 31 日) が開催されている。

吉野作造講座 1996 (平成 8) 年度からは市民講座「吉野作造講座」が始まった。12 月 14 日から概ね月 1 回の全 4 回講座で、募集定員は 40 名だった。記念館の田澤晴子主任研究員、横山寛勝資料収集嘱託員のほか、漫画・風刺画研究家で日本漫画資料館館長の清水勲氏をゲスト講師に迎えた。翌 1997 (平成 9) 年度はより内容を充実させ、2 テーマで各 4 回講座を並行して開催した。

直営時代の吉野作造講座は、記念館研究員・嘱託職員のほか、各年度ゲスト講師を招く形で行われていた。1998 (平成 10) 年度の御厨貴氏、1999 (平成 11) 年度の北岡伸一氏は吉野作造賞の受賞者でもあり、民間委託期以降の恒例行事となる読売・吉野作造賞受賞者講演会の源流ともいえる。また、名誉館長に就任した井上ひさし氏の講演会「井上ひさしの吉野講座」も、第 1 回はこの吉野作造講座の枠内で行われている。

井上ひさし名誉館長の就任 1998 (平成 10) 年 4 月 1 日、作家の井上ひさし氏が名誉館長に就任した。同氏は吉野作造の母校である宮城県尋常中学校の後身・仙台第一高等学校の出身である。また、同校を舞台とした小説『青葉繁れる』などの作品で知られる。中央公論社の仲立ちにより、前年 12 月に中川俊一古川市長が直接面会して交渉、快諾を得た (『大崎タイムス』1998 年 3

月 27 日)。この年の「生誕 120 周年記念吉野作造公開講座」のひとつとして 12 月 20 日に講演。以後、井上氏が死去する前年の 2009 (平成 21) 年まで、年 1 ～ 2 回「井上ひさしの吉野講座」と題した講演会が吉野作造記念館を会場に行われた。

在任中の 2003 (平成 15) 年には、吉野作造と吉野信次兄弟をモデルとした戯曲「兄おとうと」を書きあげている。2006 (平成 18) 年 3 月 13 日には、古川市閉市記念としてこまつ座による同作の公演が古川市民会館で上演された。

記念館だより 1996 (平成 8) 年 1 月 1 日、館の広報として『吉野作造記念館ニュース』第 1 号が発行された。翌年 2 月 1 日発行の第 2 号より『吉野作造記念館だより』に改題。当初は新収蔵資料の紹介、職員によるコラム (横山寛勝「吉野作造上京後の転居ものがたり」、第 2 号) や寄稿 (櫻井滋郎「吉野作造博士と祖父順蔵」、第 2 号) が中心であり、事業報告的な内容は少なかった。また、記念館の活用方法のレクチャーなど (「記念館資料のこともっと教えて!」、第 4 号) も多かった。また上述の第 2 号では、吉野作造を教材とした授業を行ったとして、仙台市立南小泉小学校、岩出山町立真山小学校の事例を紹介している。

声のライブラリー 1999 (平成 11) 年 5 月より、吉野の著作を朗読したカセットテープ・CD の製作・貸出を行う「吉野作造・声のライブラリー」を開設した。主に視覚障害のある利用者を念頭にしたもので、「村芝居の子役」(1923 (大正 12) 年 1 月)「日清戦争前夜」(1933 (昭和 8) 年 1 月)とい

った、比較的読みやすく親しみやすい随筆を中心に収録された。製作には古川オフトーク通信株式会社、および同社アナウンサーの千葉めぐみ氏が協力した。

第3節 資料の収集

直営期の主な寄贈資料 開館前後には、1994 (平成 6) 年に吉野長女の土浦信氏より自作の絵画 16 点が寄贈され、開館に合わせ廊下に展示された。また同年、吉野と親交のあった画家渋谷栄太郎の絵画作品 3 点が、渋谷和邦氏より寄贈されている。同じく開館と前後して、市内の画家白鳥兵一氏より吉野作造肖像画 2 点、永野病院より沼田稔夫作の絵画 1 点、藤門ゑくよ氏より自作の絵画 1 点が寄贈された。また、1994 (平成 6) 年 11 月には古川市の佐藤病院より図書購入費として 200 万円の寄附があり、『朝日新聞縮刷版 (大正編)』(全 84 巻、別巻 1 巻)、『国家学会雑誌 (明治編)』(全 57 巻) の購入費に充てられた。

開館直前から古川市直営期に寄贈を受けた重要な資料としては、1997 (平成 9) 年に吉野俊造氏より寄贈された「赤松克麿筆記吉野作造講義ノート」(全 5 冊) がある。これは民本主義を提唱する前後の、吉野の東京帝国大学での講義内容を克明に記録したノートであり、2016 (平成 28) 年には吉野作造講義録研究会により翻刻され、『吉野作造政治史講義一矢内原忠雄・赤松克麿・岡義武ノート』として岩波書店より刊行されている。

1998 (平成 10) 年に三浦よし子氏より寄贈された「三浦吉兵衛関係資料」は、吉野

作造の小・中・高・大学の同窓生、三浦吉兵衛の青年期から壮年期に至るまでの文書を中心とした資料群である。三浦の中学生時代の作文帳や雑記帳、吉野が宮城県尋常中学校（現・仙台第一高等学校）在学中に編集にかかわった学内雑誌『如蘭会雑誌』1・2号などが含まれ、吉野たちの中学生時代の生活や思想をうかがい知ることができる資料群である。

また、同年には鹿島理智子氏より「鈴木安蔵旧蔵吉野作造関係資料」が寄贈されている。鈴木は、吉野が亡くなる直前に面会し、憲法制定史研究の教授を受けた人物で、戦後は憲法研究会の中心として「憲法草案要綱」の起草を行った。本資料は吉野が鈴木にあてた3通の直筆葉書、鈴木による吉野との邂逅時の思い出を記した原稿などが含まれている。

その他、開館直前から古川市直営期に寄贈を受けた主な歴史資料に、吉野タケヨ氏から「古川吉野家資料」（1994年度）、吉野俊造氏から「吉野たまの愛用ミシン」（1996年度）、谷地森隆氏から「古川町宿舍図」「吉野年蔵町長時代の辞令」（1995年度）、佐々木一郎氏から「佐々木平之丞あて吉野作造書簡（1900〈明治33〉年9月17日）」（2001年度）などがある。

保存・管理の取り組み 1998（平成10）年度には、館内閲覧限定ながら館蔵図書目録が完成している。同じく1999（平成11）年3月には『吉野作造記念館館報』が発行された。施設概要、開館までの沿革、開館以降の企画展・講演会など事業記録のほか、当時の段階での所蔵資料目録も収録されてい

る。以降2012（平成24）年度の『吉野作造記念館所蔵資料目録』刊行まで、公刊された館蔵資料目録としてはこれが唯一のものとなる。

第4節 利用者の漸減と民間委託

民間委託へ 1998（平成10）年度の入館者数は6,082名と、ピークである1995（平成7）年度の半分以下となる。その後も入館者数は減少を続け、1999（平成11）年度5,508名、2000（平成12）年度5,007名、直営最終年度である2001（平成13）年度は4,638名に落ち込んだ。

2001（平成13）年5月、古川市では財政健全化推進計画を策定し、それに基づき公共施設運営の見直しを始めた。民間委託を検討する対象となった施設・サービスには、吉野作造記念館も含まれていた。同年11月23日、古川市、古川青年会議所（斎藤秀明理事長）、市民会議「すきです古川わたしの広場」（角田稔代表世話人）の三者共催による市民フォーラム「みんなで考えよう民間委託」が記念館で開催された。民間委託に向けてのビジョンを広く市民に伝えることを目的として企画されたものだった。

当時の報道をみると、『河北新報』11月28日によれば、

市の橋本正敏助役が民間委託について行政側の考え方を説明し、「委託によって少ない経費で効率的な運営が期待できる」と述べた。来年度に市直営から民間委託への移行が検討されている吉野作造記念館については、現在、委託先に市民団体

「吉野先生を記念する会」を考えていることを明らかにした上で「運営の最終責任はあくまで行政にある」と強調した。

として、市側の狙いとしては経費削減が第一であり、委託先は吉野先生を記念する会を前提として話を進めていることが明らかにされている。続く主催 3 団体のパネル討論では、

民間委託自体は出席者から「時代の流れから有効な手段」と肯定的な意見が多かった。その一方で「民間ができることをなぜ行政ができないのか、行政側の意識改革が必要」「はじめに人件費削減ありきの民間委託ではだめ」という意見もあった。

として、人件費削減を主目的とした形ではなく、いかに良質なサービスを提供できるかという観点から民間委託を議論すべきという指摘が出た。議論の内容は違うが、開館前にも表れた市と市民が目指す方向性の違いがここでも顕著になったといえるだろう。

NPO法人古川学人 実際に記念館の運営を民間委託されることになったのは、吉野先生を記念する会ではなく、新たに設立された特定非営利活動法人（NPO法人）の古川学人であった。同団体は「吉野先生を記念する会が母体となり、市民運動等に携わってきたメンバーが加わり、両者の価値観が融合して出来た団体」（『記念館だより』第7号）である。

設立当初の役員は理事長＝佐々木源一郎、副理事長＝佐々木一郎、田中昌亮、専務理事＝佐藤俊明、財務理事＝石ヶ森信幸、理事＝角田稔、松倉善昭、高橋よし子、監事＝佐々木登久男、落合利恵子となっている。理事長および副理事長は吉野先生を記念する会の、専務理事・財務理事は上述の市民会議「すきです古川わたしの広場」の人脈であった。

おわりに

吉野作造の顕彰運動の始まりから記念館の開館まで長年にわたり尽力した、吉野先生を記念する会事務局長の永澤喜一氏は、開館を目前に控えた時期、新聞に次のような一文を寄せている。

知人や思いがけない人から、「記念館ができて願いが叶いましたね」と労いの言葉を頂き、「お陰様で」とお礼を述べている昨今である。また、「吉野先生は学者だから、硬くて、難しくて、記念館は一度行っても、二度三度と行くところではないようですね」と好感とも何とも不透明なお話をなさる人が多い。（『仙北新聞』1995年1月21日）

永澤氏自身は、ぜひ二度、三度と通いながら理解を深めてほしいと前向きに文を締めくくっている。しかしその後の記念館の入館者数の推移をみると、この懸念は的中したと言わざるを得ない。まさに、「一度行っても、二度三度と行くところではない」という印象を、事業を通じて払拭していく

こと、リピーターを確保していくことが、直営時代から連綿と続く記念館の課題となった。

前述の『吉野作造記念館館報』によれば、吉野作造記念館の運営方針は「郷土の誇りである吉野作造博士の偉業を顕彰するとともに、博士の唱えた「民本主義」の精神を発展・継承させ、デモクラシーを館運営の基本とする。」、事業目標は「吉野作造博士関係資料の収集、保存、展示、調査研究に努めるとともに、記念館が多くの市民に親しまれ、よりよい市民社会の実現を目指し、講演会、フォーラム、企画展、吉野作造講座の開催や各種刊行物の作成など、多彩なソフト事業の展開に取り組む。」とされていた。

事業目標については、さまざまな試行錯誤があったが、やはり開館年をピークに質・量ともに退潮傾向であったと言わざるを得ない。当初は年間2～3回開催されていた企画展（写真展・パネル展等を除く）が1998（平成10）年以降年1回に減少したことは学芸活動の退潮を特に象徴しているといえる。研究紀要が存在しなかった直営期にあって、企画展は研究員・学芸員による資料調査や研究に関する成果を公にする場としての役割も大きかったと考えられるからである。

また、「記念館が多くの市民に親しまれ」という点についても、やはり開館時をピークに質・量ともに退潮傾向であったといえる。講座・講演会は、連続講座である吉野作造講座に収斂することで内容の充実が図られた。だが、単発の行事が減ることは同

時に初見者の参加へのハードルを上げ、参加者の固定化につながった可能性もある。

小・中学校や高校の生徒の利用拡大も早くから課題として意識されていたが、小・中学校巡回展などを除いて記念館が主体的に行う事業は少なく、基本的には学校側の利用を待つという受け身の姿勢であり、積極的な手を打つことができていたとは言い難い。

また、運営方針にある「デモクラシーを館運営の基本とする」とはどういったことを指しているのか、直営時代を通じて明確化できなかったのではないか。市民により構成された運営審議会は、審議内容がどの程度運営にフィードバックされていたのかも不明瞭である。「市民参加型」施設の目玉と位置づけられたバーチャル・デモクラシー・ディスカッションも、そのシステム上数年とかからず陳腐化することは目に見えていた。具体的な事業を通じて「市民参加」「デモクラシー」をどのように実現していくか、こうした課題は、続く民間委託～指定管理の時代に引き継がれることになる。

註

- (1) 法人文書：「開館記念式典」、整-214/5-5.
- (2) おおさき文化研究会「吉野博士記念会例会記録（第1・2回—1950～51年）」
『吉野作造研究』第20号、2024年4月。
- (3) 『記念館だより』第4号、1999年4月。
- (4) 同上。